

日蓮聖人と大震災

中 尾 堯

ご紹介にあずかりました中尾でございます。以前、大震災に遭った牡鹿半島を石巻から女川までバスで旅行いたしました。

実はそこが今度の大震災に遭って大変な災害が起こった地帯です。今日ここでお話しするときに、何よりも私はその惨状を目にしたいと思ひまして、この間仙台から石巻方面を、仙台の孝勝寺の貫首様に連れられて歩いてきました。聞きしに勝る大変な津波でした。特に石巻の北上川の河口は、かつて私のよく知っている人がいて、河口のほうを歩いたことがあります。「なかなかいい住宅地だな」と話をしながら歩いたことを、昨日のように思い出しまし。一週間前にそこを歩くともう何もなく、本当に一面野原でした。かつての家は殆どなくて、中にポツンポツンと何軒か半壊の家がありました。特にお寺の大きな伽藍がありました。「あ、お寺が残っているのか」と言っ行ってみましたら、柱だけでして、中は仏様も仏具もみんな流れてしまっていました。大変な災害でした。

それから仙台から金沢に用がありましたので、仙台の岩沼空港から小松空港まで飛行機で行くことになりました。仙台を少し早く出すぎ、飛行機に乗るまでの時間があり、空港から外へ出てあちこち歩いてみました。太平洋の縁か

日蓮聖人と大震災（中尾）

らわずか二百メートルぐらいのところを歩いたのですが、木がなぎ倒されていました。そばに共同墓地がありまして、行ってみたら新しいお墓に随分流された傷跡がありました。そのお墓の幾つかには三月十一日という日付がま新しく刻まれていました。この時から震災についていろいろとものを深く考えました。まずは、大震災と津波の跡という、大変な場面を目の当たりにしたことをお話ししました。

今日のテーマは日蓮聖人と大地震です。日蓮聖人の宗教を考えた場合に、大地震というものは大変な意味を持っているということが言えると思うのです。日蓮宗の伝統の中で日蓮聖人と大地震ということはあまり言われてきませんでした。大地震とは関係あるとは思っても、あまり高く評価され問題視されてはいないです。しかし日蓮聖人の伝記をみますと、日蓮聖人は大地震によって大きな飛躍を遂げられたと考えていいのではないかと思います。

日蓮聖人が建長五年の四月二十八日に清澄山で、日蓮宗の立教開宗の宣言をなされました。その後鎌倉にお出になられた。伝説によりますと大体清澄山を下りるとすぐそのまま、その足で鎌倉におられたと考えている方がほとんどですが、どうもそうではないらしい。清澄を出てから房総半島をあちこちと歩きながら、そして今の中山法華経寺の近辺に滞留されたようです。それから鎌倉にお出になられたという次第だと思っています。

この間の事情につきましては、また別にお話しする機会があるとは思いますが、先般、房総半島の大多喜博物館で「房総の仏教文化」という題で講演をしました。その講演をする前に、私はあらかじめ房総半島のあちこちの寺院を、学芸員の方に案内してもらって歩きました。房総半島というと、大体日蓮宗のお寺ばかりだろうと皆さん思われるでしょうが、そうではなくて、真言宗と天台宗のお寺が随分あります。

日蓮聖人ははじめ天台宗の僧でしたから、清澄退山後に房総地方の天台宗のお寺をあちこち回りながら、最後に今

の市川市にあたる八幡荘に赴かれました。現在、ここには中山法華経寺があります。この辺にしばらく滞留された後に、鎌倉にお出になられたのです。そのとき、日蓮聖人は冒頭から街頭に立つて布教する方針は取られませんでした。日蓮聖人という方は非常に慎重な方でして、ご自分が十数年比叡山で学ばれたその仏教の成果が、関東のあの武士の社会でどう意味を持つかっていうことをお考えになりながら改めて学び熟考されました。

今では非常に機械文明が発達して、ボタンを押せば何でも用が足せる時代ですが、日蓮聖人当時一般的な方法で断の勉強をなさいました。日蓮聖人はとにかく多くの書物を読み、その要点を筆で筆記されたのです。今日では、法華経の大事な箇所を抜き書きするのは、「日蓮宗電子聖典」から引き抜いて写せばよいのですが、昔の人はみんないちいち書き写したのです。我々が学生のときにはみんなペンで要点を書き写しました。これを「抄」と言います。抄出ということです。日蓮聖人はいつも手元にご自分が抜き書きされた抄出した本をお持ちで、ノートをいつもお持ちになっておられました。学生の皆さんも、日蓮聖人に倣って多くの書物を読み、要点を抜き書きをすることによって、仏教の学問を進めてください。

日蓮聖人は、とにかく抜き書きをして、伝来する仏教書を真剣にひもといで、要点の抜き書きをされたのです。ですから信者から信仰について何か相談があったとき、その抜き書き帳を見ながらわかりやすく故事を引いて文をしたため、お手紙としてお届けになりました。日蓮聖人にとって、このような抜き書き帳は、布教活動の生命でした。鎌倉へ出られた日蓮聖人は、鎌倉の松葉ヶ谷に草庵を営まれましたが、その松葉ヶ谷という地名が今どこにあるか分からないです。

この日蓮聖人のせっかくの庵室も、やがて大変な天災の被害を受けることになりました。それは正嘉元年（一二五

七）のことです。ところで日蓮聖人のお生まれになった年を覚えていますか。西暦で一二二二年という覚えやすい年です。正嘉元年は一二五七年ですから、この時日蓮聖人は数えて三十六歳です。その年の八月二十三日は、現代の太陽暦で言いますと十月二日にあたり、もう晩秋です。

鎌倉時代の史料として重要な、『吾妻鏡』という幕府の記録の中に、正嘉元年八月二十三日の宵に大地震が起こったという記事があります。全部漢文ですので、私が先年『日蓮』という書物を著した書物の中なかに、次のように書いています。「秋の日が暮れて間もない午後八時ころ、暗くなつた鎌倉の町は大音響とともに大地震に見舞われた。このため神社仏閣は倒壊し、周辺の山は崩れ落ち、人々の家屋敷の多くは倒壊し、築地^{つくじ}のほとんどは破損した。あちこちの地面は裂けて、その底から水が湧き出た。中下馬橋あたりの土地は裂け破れて、その中から青い炎が燃えだした」。

大変な地震です。今度の大地震に優に匹敵するような災害でした。当時の鎌倉は度々地震に見舞われましたが、この度の大地震はそのなかで群を抜いて大規模なものでした。

先年私が鎌倉に行ったときに、知人がちょうど発掘をしておりました。それをみていますと土の中から、黒土の中にお碗だとか木の箸だとか生活用品が出てきました。その箸は割箸のような形で、昔の粗末な庶民が使った箸です。今の鎌倉駅の辺は、かつて庶民の家がひしめいていました。現在ではビルが立ち並んでいるあの辺は、かつて大体柱を縦縦横横に建て並べた簡単な町屋でした。屋根は藁や板葺きで、文や木材をそのまま置いて、風に吹き飛ばされないうように大きな石が置いてあります。そういう簡単な造りの民家です。ですから少し揺れば、もうあつという間に倒れてしまう。恐らく正嘉の大地震で、鎌倉の民家はみんな倒れていったと考えられます。もう大変な災害でした。

鎌倉の地勢は、一方が海で三方が山に囲まれています。その周囲の山を要害の役割を果たすように切って、崖のような急斜面に成型し、これを「切岸」といいます。鎌倉は、四方を要害に囲まれた軍事都市でもあります。現在も切岸の跡は多く残っていて、石は風化して崩れる恐れがあるので、危険地帯になっています。日蓮聖人が鎌倉に出られた時期は、源頼朝が鎌倉を根拠として幕府を開いてからすでに六十年以上も経っているので、切岸もそろそろ崩れやすくなってきました。

このため、大地震が襲来すると、大石が崩れ落ちて大変な被害を与えます。

正嘉の大地震は、都市災害と自然災害の両方が相俟って、被害をさらに大きくしました。神社仏閣は倒れ破損し、周囲の山は崩れ落ち、人々の家屋敷の多くは倒壊し、築地のほとんどが破れたということです。あちこちの地面は裂けて、その底から水が吹き出て、割れた地の底から青い火が燃え出しました。

大災害に見舞われて、日蓮聖人の庵室も恐らく壊れて住むこともできなくなったことでしょう。日蓮聖人は、この後鎌倉を離れて、目前に広がる大災害の根源は何であろうかと、自問自答しながら旅立たれました。この大地震に遭遇して、日蓮聖人ご自身が弟子とともに逃げ惑った被災者なので、受難者の立場からの思索の旅でした。

この間、石巻の法音寺にお伺いして、いろいろと惨状を聞きました。お寺は少し高いところで、ここまで津波は来ないだろうと思っていたが、五十センチの高さまで来たのだそうです。それも三波に分かれ襲来したそうです。最初に波が来て、びっくりしているうちに、今度は二番目の波が来た。また来たかと思ってもう一回。三回来て寺は水浸しになったそうです。

この正嘉大地震のときに、津波があったかどうかはよく分かりませんが、とにかく大変な中を、皆右往左往したの

日蓮聖人と大震災（中尾）

でしょう。ただ、石巻の人が言っていました、不幸のなかにも一つ幸いだったのは、津波の襲来が昼間だったことです。これが夜だったら被害は五倍か六倍もあっただろう、電気は消えるし、とにかく死の町になり、もう大変な目に遭ったようになったはずです。正嘉の大地震は今度の東北大地震と違って夜の大地震ですから、混乱もひとしおであったと思います。

鎌倉を離れた日蓮聖人の足取りは、具体的にどう辿られたかは分かりません。一説によりますと、富士の実相寺の経蔵に入り、一切経をご覧になったといえます。

「一切経」は仏教全書ともいうべき大部の叢書で、この身延山にも何セットか現存します。一セットで巻数が大体六千巻にもものぼるのです。要するに一切経は六千冊あるのですが、その六千冊が六十の箱に分納されているのです。つまり一箱に百巻ずつ入ったのが六十箱あるわけです。実相寺にまいますと、その日蓮聖人がおいでになった頃は一切経が三冊ほどあるのです。この三冊はうまく難を逃れたのでしょうか、他のものはいつしか失われてしまいました。

日蓮聖人は、その実相寺で一切経をご覧になったといいますが、そう簡単に一切経を通読するわけにはいきません。全部を読まれたのではなくて、先ほど申しましたようなメモ帳をそばに置いて、意味のあるところを選んで読まれたのでしょうか。こうして出来上がったのが『立正安国論』で、文応元年（一二七〇）にこれを勧えおわるとされる書です。

この『立正安国論』の冒頭は、学生さんはぜひ覚えてください。法要のときに、「日蓮聖人のたまわく、今本時の娑婆世界は……」と『観心本尊抄』の一句を空んじますが、これも覚えたほうがいいと思います。

旅客来たり嘆きて曰く、近年より近日に至るまで、天変地天・飢饉疫癘・あまねく天下に満ち広く地上にほとばしる。牛馬は巷に倒れ骸骨は道にみたり。死を招くのとがらは既に大半に超え、これを悲しまざるのやからあえて一人もなし。

漢文の韻を踏んで調子よく記述した文章を、四六駢體しやくべんたいといい、漢文の漢文たるゆえんはここにあります。一番大事なことです。だからこゝは覚えておいて。「旅客来たり嘆きて曰く、近年より近日に至るまで、天変地天・飢饉疫癘・あまねく天下に満ち広く地上にほとばしる」。

こんなことは昔あったのかと思っているうちに、このあいだの大地震が起った。まさにそうではありませんか。天変地天、飢饉疫癘。鎌倉時代にはなかった原子力の問題が出てきたではありませんか。まさに『立正安国論』の冒頭のこと全部ある。現代の現状認識として意味があるのだと思います。

あと書きには「文応元年これを勘う」と書かれています。この間『立正安国論』の奏進七百五十年をやったばかりでしょう。この書の最後に「正嘉にこれを始めてより文応元年に勘えおわる」。「正嘉にこれを始めて」ということは、正嘉の大地震を契機としてこの書物を書くかと思つて資料を集め始めた。正嘉にこれを始め、文応元年に勘え終わるということです。「勘える」ということは、これは普通のこの考えるとは少し違うニュアンスを持っています。それは、さまざまな今までの過去の出来事を記した書物をよく資料を集めて、その上で考えるのです。だから何か大変な問題が起こると、昔にそういう先例はなかったか、地震が起こると中国の歴史の中から地震に対する記事をたくさん集めてみて、その結果、今度の地震というものはこういう意味を持っているのだ。それを考えるのが、この「勘える」なのです。その法論を一つの書物にして幕府に出すのが勘文なのです。

これは何か事が起こったときに、その理由はこうしてかということに学者に聞いて、聞かれた学者はこの問題について故事略歴の史料を集めて一文を草し、依頼者に提出するのが勘文という書です。例えば起きてみたら門の前に犬が死んでいたの、これはどうも不吉だとみてその先例を調べて、意味あいを調べて報告するよう、陰陽師に命令します。陰陽師はいろいろと書物を開いてみて、これを占って報告するのです。その報告書を勘文といい、本来、幕府だとか朝廷が命じてそれで作らせます。

ところが日蓮聖人はそんなことを待つてはおれません。幕府から日蓮聖人にこのことを調べよという命令が来るわけなのでしょう。ですから日蓮聖人は自分で、いわば自発的に勘文を作って差し出した。だから日蓮聖人のこの勘文は公の勘文ではなくて、「私の勘文」です。

渡邊寶陽先生は日蓮教学ではトップの方です。かつて先生に「三大部」について質問したことがあります。渡邊先生は宗学の立場から、日蓮聖人は三大部という、『観心本尊抄』と『開目抄』と『立正安国論』とされています。確かに『観心本尊抄』は教学書で、「今本時の娑婆世界は……」と教学のもっとも大事なところが述べられています。『開目抄』もまたそのようなのです。しかし、『立正安国論』は勘文だと、日蓮聖人御みずから示されています。しかし、教学の面から見ると、『立正安国論』を教学書として受け止めるのは当然のことです。しかし、歴史的に見るとやはり教学書ではなく、勘文として北条時頼に提出された書です。もっとも、三大部から『立正安国論』を除外するという説は随分昔からあったのです。しかし、渡邊先生がよく言われました。歴史的に言えばそうかもしれないけども、我々は教学書としてその中に日蓮聖人の教えがどう込められているか考えなくてはいけない。これは賛成です。ですから私は三大部の中から法華経を除外するということは間違っていると思います。歴史的に言うならば勘文のだけ

ども、これを日蓮宗では教学書として受け止める、そういうことかと思ひます。

日蓮聖人は、『立正安国論』の跋文に、「去る正嘉元年八月二十三日戌亥の刻大地震にこれを勘える」とし、「文応元年にこれを勘え終わる」と記されています。さらに、「その後文応元年七月六日に宿谷禪門に付して故最明寺入道殿に奉る」と続けられます。最明寺入道殿とは、前執権北条時頼で、政治の第一線を退いたとはいえ、なおも隠然たる実権を持っていました。

正嘉の大地震を契機に著された『立正安国論』をもとに、日蓮聖人の地震に対する考え方、感じ方などを窺うと、日蓮聖人に独自の重要な点が注目されます。それは、日本の歴史の中で地震という大災害を体験し、これを信仰のなかで意味づけた宗教者は、日蓮聖人ただ一人という事実です。地震に素早く反応し、これを宗教的に理論化されたのが日蓮聖人です。これには、日蓮聖人の幼時体験が大きな意味をもっているに違いありません。

日蓮聖人がお生まれになったのは小湊誕生寺で、その境内には産湯の井戸などの遺跡があります。ところが誕生寺の史料をひもといてみると、日蓮聖人がお生まれになったのは現在の誕生寺のところではないのです。海辺に出て、妙の浦の磯伝いに南に行くと、大弁天・小弁天という二つの島があります。この辺はかつて片海という海辺の村で、日蓮聖人がお生まれになった故郷の地です。しかし、後に度々襲った大地震によって、この片海は海中に没してしまいました。このように不安定な土地柄ですので、日蓮聖人は幼いころから、「地震がいつたらずあそこには逃げろ。津波が来るぞ」ということを言われ続けたに違いありません。地震の怖さ、地震や津波がおそって来たたらどう避難するか、どんな惨状が起こるか、いろいろと聞かされて大きくなられたことと思います。そういえば正嘉の大地震のときに、あの混乱の中から弟子ともども亡くなった人は一人もおられません。弟子たちを導いて安全に避難されたので

す。

津波に洗われたという誕生寺には、古い歴史を語るものは何もないと判断して、歴史的にはあまり期待はしてなかったのです。ところが、祖師堂に安置されている日蓮聖人木像の修理に際して、胎内から多くの収納文書が発見されました。そのうち最も注目すべき文書は、誕生寺第三代住持日静がしたためた、貞治二年（一三六三）八月二十九日付の「日静上人願文」です。

その冒頭には、日蓮聖人が片海に誕生されたことが記されていて、确实な出生地を示す最古の記事といえます。ついで、この木像は、日静が七十八歳にして発願したこと、さまざまな願いを込めた由が述べられています。特に注目されるのは、「日蓮聖人の胎内に納め奉る五穀は衆生の餓えをいやさんがために。同じく込め奉る。葉草三種。衆生の病を治さんがために」という言葉です。実際に、小さな紙に包んだ五穀や葉草が、胎内に納めてありました。このように強烈な利他の精神は、日蓮聖人からしっかりと受け止められたに違いありません。

もう一つ注目されるのは、頭部の眉間に窪みがあって、小松原法難の傷跡を残していることです。平成二十五年は小松原法難七百五十年にあたりますが、故郷での受難の跡が日蓮聖人木像に印され、「代受苦」の慈悲行の姿が偲ばれるのは故あることです。

では、日蓮聖人は、片海での幼時体験と、鎌倉で遭遇されたこの体験を、法華経の実践のなかでどう読み取られたのでしょうか。

『妙法蓮華経』巻第五に「從地涌出品第十五」という章があります。この経文を読んでいますと、「我娑婆世界。自有三六万恒河沙等。菩薩摩訶薩。一一菩薩。各有六万恒河沙眷属」。是諸人等。能於我滅後。護持誦誦。広

説此經。仏説^レ是時。娑婆世界。三千大千国土。地皆震裂」という一節があります。「この地上には数えきれないほどの菩薩がおいでです。これら無数の菩薩らが、仏が入滅された後において、この法華經を護持し誦誦して、広くこの經の教えを説くであろう」と、仏がお説きになった。するとたちまち、「娑婆世界は三千大千国土、地皆震裂して」、無量千万億の菩薩摩訶薩が大地のなから同時に涌出するのです。しかもこれらの諸菩薩の身は金色に輝き、仏の相を供えているのです。まさに輝ける無数の菩薩の出現です。これらの菩薩のなかに四人の導師があります。一人は上行菩薩と名付け、二人は無辺行菩薩と名付け、三人は淨行菩薩と名付け、四は安立行菩薩と名付けるのです。上行、無辺行、淨行、安立行と名付けたこの四菩薩は、大地の底から同時に涌出した無数の菩薩のなかの最上首なのです。四菩薩の出現は、この現実の娑婆世界に、仏の国土が現出する兆しをしめすものに外なりません。日蓮聖人が「南無妙法蓮華經」のお題目を中心に、墨痕鮮やかに揮毫された大曼荼羅本尊は、いま現出した現世の仏界を図で顕した姿です。

この度の大地震は、まさに大地の震裂そのものです。この大地震をきっかけにして、たくさん菩薩がこの地上に出現するに違いない、そう私は思うのです。その一々の菩薩を、私たちは私たち自身の中に見出す契機が、今度の大地震ではないでしょうか。多くの菩薩が私たち自身の心のなかに現れたとき、日蓮聖人が『観心本尊抄』に示されたように、「今本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なり」という境地がここに現れ、すべて衰えも知らない素晴らしい世界が広がっていくのです。

その菩薩とは一体どういう形で現れるのでしょうか。私たちはいろいろ考えます。日蓮聖人の『観心本尊抄』の教えは、まず一念三千の觀念から始まります。我々はすべて仏性を帯びた存在で、大地が震裂して現れ出たのは心の菩薩

日蓮聖人と大震災（中尾）

に違いありません。從地涌出品にみるように、菩薩は他方の国土から訪れるのではなく、この娑婆世界にこそ現れるのです。その菩薩は果して誰でしょうか。いや、その菩薩は外にいるのではなくて、我々の心の中にいるのではありませんか。我々の心が菩薩ではないですか。この我々がそれぞれ自分の心のなかに、内なる仏を見いだす大きなきっかけを、大地震の震裂は示しています。菩薩はお互いのあらゆる多くの方々の、限らない連帯を進めてまいります。どうか地震というものを單なる災難と考えないで、地震と法華經の教え、日蓮聖人と大地震の信仰上の意味付けを、私たち自身の心に内在化していきたいと念じます。

日蓮聖人は、弘安五年（一二八二）の還暦の歳にご入滅なされました。この十月十三日は新暦の日では十二月二日にあたり、午前八時ころにあたります。私はたびたび池上本門寺にお参りします。先日も、ご入滅はこのころなのだと思い、秋深い池上の山上を見ながら、日蓮聖人もこれをご覧になったのだろうなと思いました。

日蓮聖人がご入滅なされたときに、わずかに地震がありました。地震というもの、さまざまな災害を残して去っていったあの地震というものを、私どもは今こそ内面的に受け止める必要があるのではないのでしょうか。先日の三日間の東北の旅の中で、そういう思いを深くしてまいりました。こういった私の思いをお伝えしました。そろそろ時間でございますので終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございます。（拍手）